

太宰府の文化財

448

―国史跡指定100年― 筑前国分寺跡

現在世界的に猛威を振るっている新型コロナウイルス感染症と同様に、今から約1300年前の奈良時代にも、感染症による国難を迎えた時期がありました。

『続日本紀』によれば、天平7(735)年、大宰府管内で疫病が流行し多くの死者が出たことが記されています。死者の中には一般の農民も多かったようで、大宰府では管内(九州)の税の一部を免除するなどの対応がとられました。その2年後の天平9(737)年にも疫病が流行し、感染は九州だけにとどまらず、藤原氏の四兄弟(武智麻呂、房前、宇合、麻

呂)をはじめ中央の官僚たちも多数死亡するなど、一時的に日本の政治機能がまひするほどでした。

また、その当時日本を襲ったのは疫病だけではなく、以前から日照りによる不作、地震や台風といった自然災害にも見舞われていました。その頃に筑前国守であった山上憶良は、見聞きした庶民の苦しい生活のさまを歌に詠み、「貧窮問答歌」として『万葉集』に残されています。

こうした数々の災いに苦しむ国民を仏の加護によって救おうと、天平13(741)年、聖武天皇が「国分寺建立の詔」を発し、国ごとに国分寺と国



国分寺の特徴的な建物として、七重塔が挙げられます。現地には、塔の巨大な心礎(芯柱を支える礎石)が残り、発掘調査の成果をもとに瓦積み地基壇が復原整備されています。この塔を10分の1サイズで復元した模型を、文化ふれあい館で屋外展示しています。(画像は模型を写真測量した3Dデータ)



筑前国分寺の伽藍配置(建物の並び)

北から一直線に講堂、金堂、中門、南門が並び、金堂と中門をつなぐ長方形の回廊がめぐり、その内側の東側に推定で高さ50mを超える七重塔が建っていました。現在、金堂跡の部分には、江戸時代に再興された後継の筑前国分密寺が建っています。

分尼寺を建てる事を命じたのでした。この命により、ここ筑前国においては、四王寺山の南西裾の好立地を選んで国分寺が建てられ、現在の「国分」という地名の由来となっています。

筑前国分寺跡は、大正11(1922)年10月12日に国の史跡に指定され、本年度1000年を迎えます。現

在、文化ふれあい館で開催中の通史展「まるごと太宰府歴史展2022」で特集展示していますので、ぜひ観覧してください。

文化財課

遠藤 茜

※筑前国分寺跡国史跡指定100年を記念したイベントを10月6日(水)に開催します。
くわしくは、文化ふれあい館のホームページで確認してください。

編集/太宰府市総務部経営企画課: 〒818-0198
☎092(921)2121 FAX(921)1601

太宰府市観世音寺一丁目1番1号
✉keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp

太宰府市公式SNSの
フォローをお願いします!

